

薬師寺金堂発掘調査概要

1. 遺 構

今回の調査は金堂復興工事に伴い、創建当初の遺構をあきらかにするために実施された。発掘に先立ち、現基壇の写真測量をおこない、ついで江戸時代に拡大修造された壇正積基壇の花崗岩化粧石・敷瓦・旧裳階柱筋の置き重ね礎石及び地覆石などを取り外し、さらに向拝部の礎石・積土を排除した。以下検出した創建時の遺構について述べる。

基壇は東西 $29.19m$ 、南北 $18.01m$ 、復原高 $1.49m$ (5尺)である。基壇の掘込地業はみられず、積土は砂土と粘土の互層によって積み固められている。地覆石は地山上の整地土に据えられており、延石はみられない。周囲の基壇石積は束石を用いず厚い羽目石を立てただけの古い形式で、隅の羽目石はL字型のものを使用している。

建物は7間×4間、裳階つきで、桁行柱間総長 $26.73m$ (90尺)、梁行柱間総長 $15.60m$ (52.5尺)、軒の出 $4.16m$ (14尺)である。(各柱間寸法は図面参照)礎石は基壇土を途中まで積上げた段階で掘り込み据えられている。根固石はみられない。裳階礎石は現側柱礎石の直下にそれぞれ認められ、据えつけ掘方は基壇上面から切込まれていた。本柱と裳階柱の礎石の据えつけ方がこのように何故異なるかは明らかでない。なお、裳階礎石は特に不同沈下が著るしい。

礎石地覆座の有無及び形状から、身舎の5間×2間は前面中央3間と背面中央1間が扉で、その他は壁で囲われていたと推定できる。その外の側柱筋は開放であったらしい。裳階では背面中央5間の礎石にのみ地覆座がある。その形態からみて中央の1間は扉口、両脇各2間は壁と考えられるが、背面以外の扉や窓の配置については不明である。

階段は正面では中央及び2間において東と西に計3個所、東西両側面と背面ではそれぞれ中央に1個所ずつ幅1間分の規模のものが設けられている。

基壇まわりには玉石敷の犬走りがあり、さらに幅 $0.45m$ の雨落溝がめぐら

されている。玉石敷や溝には補修されている部分がある。

なお、創建後の遺構の変遷について述べると、享祿の火災によると思われる羽目石の焼損痕跡や焼土面により、火災以前に、正面の東と西の階段が取除かれていたことがわかる。また現向拝礎石の真下から中世に据えた礎石が検出され、その上面に前記の焼土層が密接するので、中央5間分には中世から現状と同規模の向拝のあったことが判明した。正面両脇階段の取除きはこの向拝の設置に関連するのであろう。なおこの向拝には板張りの床が設けられた時期のあったことが、羽目石上端になされた根太仕口により推察される。唐招提寺の例などからみると、向拝部が舞台のように使用されたものと思われる。

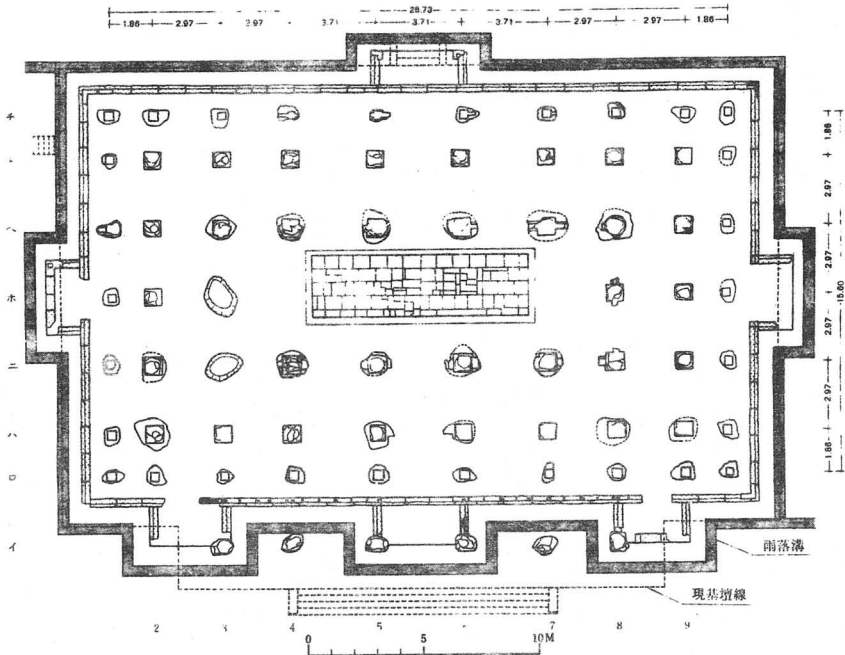
2. 出土遺物

- 青銅製品 葡萄唐草文飾金具、垂木先飾金具（方形・円形）、鈴、その他
- 鉄製品 釘類
- 古銭 大観通宝、寛永通宝、その他
- ガラス製品 玉類
- 乾漆 仏像破片
- 瓦 蓮華文・巴文軒丸瓦、唐草文・劔頭文軒平瓦、道具瓦、その他
- 土器 土師質灯明皿、その他

3. 薬師寺路年表

- 天武9年（680） 天皇、中宮（後の持統天皇）のために薬師寺の建立を発願す（本薬師寺）
- 養老2年（718） 平城京内右京六条二坊（現在地）に移建す
- 天平2年（730） 東塔建つ
- 天祿4年（973） 火災により講堂、食堂、三面僧坊以下の諸堂焼失。金堂・東西両塔は無事
- 永祚元年（989） 大風により金堂上層の閣、吹落される。
- 康安元年（1361） 地震により金堂上層傾き、両塔破損す。

- 文安2年(1445) 大風により金堂・南大門倒壊す。
- 文安5年(1448) 仮金堂成る。
- 大永4年(1524) 金堂再興
- 享祿元年(1528) 兵火により金堂・講堂・西塔など焼失す。
- 天文8年(1539) 大風により諸堂破損
- 天文14年(1545) 仮金堂再興(現金堂東墨書)
- 慶長5年(1600) 増田長盛 仮金堂を修造す。
- 寛永12年(1635) 仮金堂を瓦葺とす。
- 延宝4年(1676) 金堂修理再建
- 宝曆・明和・安永 金堂修理



金堂基壇平面図